

戦前の東京におけるキリスト教セツルメント

○ ノートルダム清心女子大学 杉山 博昭 (01043)

キーワード：キリスト教 教会 セツルメント

1. 研究目的

戦前期において、社会事業の発展に大きな役割を果たしたのが、セツルメントである。セツルメントは草創期以来、キリスト教系の活動が先駆的であった。ところが、キリスト教のセツルメントについて、一番ヶ瀬康子が「活動の目的を、布教と直結させておこなったものがほとんどであった。したがって、慈善事業を変質するどころか、自らが慈善事業として、形式的にセツルメント活動を継承したにすぎなかった」（『社会福祉の歴史研究』労働旬報社、1994年、234頁）という批判的な見解を示しているように、活動の広がりなどに比べて、十分な評価を受けていないように思われる。

しかし、東京に多数のキリスト教セツルメントが展開した事実を見ると、その意義を史料に基づいて、十分に検討する必要があるといえる。キリスト教は慈善事業の時代に、自由な立場でさまざまな事業を創設したが、自由な姿勢を継承しつつ、社会的性格を大きく開花させたのが、キリスト教系のセツルメントであった。キリスト教のセツルメントは1920年代から30年代にかけての社会事業の発展について、実践においても、思想・理論においても、大きく貢献した存在であったのではないだろうか。

その際、大阪でのキリスト教系のセツルメントに関して、比較的研究が重ねられて貴重な成果がみられる反面、東京のセツルメントについては、興望館の年史など限定されている。研究の不十分さが、適切な評価がなされない一因であろう。そこで、東京のセツルメントを取り上げてその性格を把握し、社会事業への貢献について検討する。なおカトリックでも、上智カトリック・セツルメントが創設されているが、他で論じたことと信仰と社会事業とのつながりの相違もあるので、プロテスタントに限定している。

2. 研究の視点および方法

1920年代から30年代にかけて東京で活動したキリスト教系のセツルメントについて、できるだけ網羅的に取り上げ、その実践内容や思想について分析する。関係の『年史』などを前提としつつ、『社会事業』『社会福利』『私設社会事業』等の社会事業雑誌や、各セツルメントによる刊行物等の史料、事業創設者や実践者の著作物を活用していく。その際、活動と関係教派・教会とのつながり、創設者・実践者の思想の独自性や先駆性、社会問題への認識や理解、実際に取り組んだ事業内容の把握やその意義、以後の社会事業・社会福

社への影響などの視点によって検討し、社会事業史において果たした役割を評価する。

3. 倫理的配慮

「日本社会福祉学会研究倫理指針」を順守して研究を行った。本研究は歴史研究であるので個人情報などは取り扱わないが、引用史料に不適切な用語が含まれる場合がある。研究倫理指針 33「研究者は、差別的表現とされる用語や社会的に不適切な用語であるかに関して理解を深めなければならない」について特に配慮する。

4. 研究結果

東京では当初、キングスレー館や救世軍の大学殖民館が設立されたが、長続きしなかった。しかし以後、貧困者が多く居住し関東大震災の被害も大きかった本所・深川の地域をはじめ、キリスト教系のセツルメントが生まれる。興望館は日本基督教婦人矯風会外人部関東部会の会員を中心として設立され、その後メソジスト系のミッション団体の支援を受ける。アメリカで学んだ吉見静江が赴任して、専門性を高めていった。バプテスト教会の中核的な教会として設立された中央バプテスト教会に三崎会館が置かれ、さらに深川に分館を設置して、深川社会館へと発展した。メソジスト教会の動きのなかで、日暮里愛隣団などが創設された。賀川豊彦による関東大震災時の救援活動を契機に、本所基督教産業青年会が創設された、宗教部がおかれ、教会を柱とする姿勢が強調された。宗教部は賀川が属する日本基督教会ではなく、単立教会となる。セツルメントのあらゆる事業を行っているといっても過言でないほど幅広い事業に取り組んだ。主要人物の木立義道は『社会事業』などで社会事業の協同組合化を主張するなど、社会事業論壇でも活躍している。救世軍は、東京府慈善協会の委託事業ではあるが、社会植民部を開設した。委託事業とはいえ、救世軍が社会事業をもっとも活発化していた時期の事業として、重視されていたものであった。

これら事業は、貧困者の多い地域の積極的に進出し、多くが関東大震災で多大な被害を受けながらも、それを克服して事業を継続、発展させている。谷川、木立ら対外的な発言も活発で、それは社会事業界を牽引する先駆性を有していた。

5. 考察

東京のキリスト教系セツルメントは、いずれも教派、ミッション団体、教会と密接な関係のもとで行われている。その限りでは、宗教活動の一環であった。しかし、それは困窮者である住民を広く対象としたものであり、キリスト教への好感の有無で排除したわけではない。決して「布教と直結」していたわけではない。宗教的性格の強さは、キリスト者の社会的実践としての性格を鮮明にしたことの証左である。また、労働問題など社会問題への強い意識を有した活動である。専門性という点でも、高い水準を獲得している。

本研究は JSPS 科研費 24330182 の助成を受けたものです。